

学びの広場



京都市教育委員会
教員養成支援室
令和7年11月8日 No.3

第2回京都市教育学講座 総合教育センター指導室長 東良 雅人 先生

『主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～一人一人の子どもを主語にするために～』

第2回の教育学講座は、総合教育センター指導室長 東良雅人先生をお迎えし、ご講義いただきました。

講義の冒頭では、教材や指導方法、評価の仕方など、「どうするのか（方法）」に目が向きがちな一方で、教科の目標や内容の意味理解といった学ぶこととはなにか、「なぜするのか（本質）」を知っておくことの重要性を説かれました。この本質の部分を捉えておくことが、どうするのか（方法）につながっていきます。そういう意味でも、「本質」に焦点を当ててお話をいただいた、汎用性と継続性をもつ学びは、塾生の皆さんにとって学校現場で実際に授業をつくりしていく上での確かな土台となったことだと思います。また、教師が子どもの学びの道筋を全てつくってしまうのではなく、一人一人の子どもを主語にするために、「子ども」が自身の問い合わせを立て解決する場面がある授業や「子ども」が自己決定したりする場面がある授業、「子ども」が自分に合ったやり方で学べる授業など、子どもの自主性を尊重した授業の在り方についても学ぶことができました。子どもを主語にした学びを意識することが、授業の質を高める鍵になるという気付きを得ることができました。

分散会の様子



今回の分散会で印象的だったのは、教育実習等で授業をしたときのことや学校ボランティアでの経験と結びつけたり、その時の自分自身を振り返ったりしながら、今回の講座についてディスカッションしていた点です。ディスカッションする中で、「問うことが楽しい“問い合わせ”とはどんな問い合わせだろう？ そのような問い合わせを子ども達自身が見つけられるにはどうしたらいいだろう？」「学ぶことを簡単に諦めさせないために、教師はどんなことができるのだろうか。」など、自分達の中に生まれた新たな問い合わせをグループの中で率直に出し合い、考えを深めていくことができました。

仲間のレポートに学ぶ

このコーナーでは、「レポート集」に綴られた
素晴らしい学びの1ページを紹介します。
ぜひ、仲間の学びにふれてみてください。



全体会を通じ、主体的・対話的で深い学びを実現し、複雑で激しい社会の変化に対応しうる子どもたちを育成するためには、物事の「どうするのか」で終始せず、「なぜするのか」という本質的視点を子どもたち自身がもつことが重要であると学んだ。知識・技能の習得はもちろん重要であるが、それらを活用し、未知の課題に対応できる力を育むためには、常に「なぜ」という問いの視点を子どもたちが持つことが不可欠であると考える。教師は、子どもたちが主体的に学びの土台を構築し、自らの問いを見つけられるよう、リアルな体験を通じた環境を整備するパイプ的な役割を果たす必要がある。また、教師自身も、授業や教育活動を「当たり前」とせず、常に「なぜ」の視点を持って自問自答し、学び続けることが求められていることを再認識した。

分散会では、AIとの共存が必然となる社会における子どもの学びについて議論をした。講義で示された「便利になる=考えなくなる」という言葉から、AIによる情報収集が進む中で、子どもたちが受動的にならず、批判的思考力を養うにはどうすれば良いかという点がテーマだった。結論として、AIが出す「答え」を鵜呑みにせず、その答えに対する批判的思考、また検証・分析をし、自ら問いを深める能動的な姿勢こそが、思考を深める鍵であるのではとなった。教師の役割は、単に知識を教え込むことではなく、子どもたちの「なぜ?」という問いを育み、その探究のプロセスを支援することにあると確信できた。子どもたちに「わかった」という学びの意識をもたらせ、主体者としての学びを深められる授業づくりを目指すべきである。

この学びを基に、今後は、子どもを主語とする授業を実現するために、子どもの、また自分自身の、さらには教育の「当たり前」を常に見直し続けるという学びの姿勢を大切にしたい。そして、常に「なぜ」の視点を意識して授業に臨むことに挑戦したい。教材、発問、活動、すべてにおいて「なぜこれを子どもたちに学ぶ必要があるのか」「なぜこの方法で指導するのか」という本質を問い合わせ続け、目の前の子どもたちの実態と結びつけていきたい。この「なぜ」を追求する姿勢こそが、教師自身の学びを深化させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現へと繋がる道だと確信できた。

「問い合わせ」に対して考え方を持ち、根拠を見つけていく過程で、自己の考えを広げたり深めたりすることが、子どもにとって学びとなっていました。その過程において、子ども同士が対話を重ねることによって深まっていく授業になるといいですね。「発問の質」と先生が言っておられました。対話の必然性がある発問を授業者として、考え方抜きたいです。世の中が未来に向けて発展していくのには、発見・発想が欠かせません。未知の課題に向かっていこうとする力が必要です。この力は、学校においても一人一人の成長・発達において同じだと思います。目の前の子どもの実態を見つめ、問い合わせようとする姿勢は大事です。様々な機会において今から意識していくといいですね。

～クラス担当スタッフからのコメント～

次回の講座



京都市教育学講座④

小学校専門講座『小学校における教師の実践～一人一人を徹底的に大切にする学級・授業づくり～』

中学校専門講座『中学校における教師の実践～一人一人を徹底的に大切にする学級・授業づくり～』

小学校や中学校現場で、教師として多くの児童生徒と関わってこられた教員養成支援室専門主事／指導室指導主事の先生方が講師となり、児童生徒理解を深めるために、どのような実践を積み重ねてこられたかについてディスカッションします。それぞれの先生方の学校現場でのエピソードをもとに、『一人一人を徹底的に大切にする』－その言葉の具体について考えていきましょう。